

## 日本がん疫学研究会

## 数値の意味

今まで巻頭言などと縁のなかった者が、編集部から依頼をうけ、うろたえつつ、皆様御存知よりのことを改めて書いてみた。

先日、関係分野の論文を拝見しているうちに、日常の経験からみて、信じがたいような数値が提出されていることに気付いた。一つは野外調査、一つは傷病調査統計の成績である。原著者の方々は、その数字について、あまり驚いておられる様子はなく、吟味されてもいなかった。

疫学、ことに記述疫学の基礎は計量にある。しかるべき資料を使ってしかるべく計算してゆくと、必ず、答となる数値が出てくる。それが、予期通りであれ、期待に反したものであれ、或は予期しえなかったものであれ、とにかく計算が終れば答は出てくる。しかし、問題は、もう一度、そこから始まる。

原資料の正確度からはじめて計算が終るまでのすべての過程において、必ず“偏み”があるに違いない。それで、最後にえた答には、どれだけの動揺範囲があるのか、腰だめでよいから知りたい。最も不利な条件を重ねても予期した結果は崩れないのか、吟味しなければならぬ。回答が日常経験しないほど大きい、あるいは小さい数値で、どう吟味してみても思いあたる理由がなければ、当面そのまま格納しておくことが必要な場合もある。

こうした判断には、もちろん、関連分野の内外の研究成果を調べ、求めた回答値と比較すること、統計学的な吟味をすること、などが重要である。しかし、ここで述べたいのは、それ以前の問題であって、それは常識というべきものかも知れない。ある数字をみたとき、これはおかしいとか、これはおもしろいとかを思いうる能力、これを養うことが疫学研究に役立つのではないかと思われる。

その能力は、日頃からいろんな数字をみて、与えられた条件と回答との関連を知ることにより養成されるであろうが、また、医学以外の社会現象にも、良い意味の“好奇心”をもって、観察の範囲を拡げてゆくことが、ここでいう常識を発達させることに役立つように思われる。

もう一つ、数字について気付いていることがある。“数字の独り歩き”である。私達が取扱う数字は、常に、限られた条件の中でのみ成立する。これが、その前提条件なしに、普遍的に引用される場合がある。元来の趣旨に沿って使ってもらえるよう、誤りなく基礎条件を分ってもらえるようにすることが、如何にむづかしいかを考えることがある。

ともあれ、自らも、時には、こうした誤りを犯しているのではなからうか。顧みて他を論ずるよりも、自ら三省すべきことであるか。

(藤本 伊三郎)

## WHO ワークショップの報告

1985年7月1日から7月11日まで中国沈陽市の中国医科大学でWHO主催のワークショップが開かれ、中国における胃がん問題が診断、治療、病理、それに疫学の各面から掘り下げて討議された。日本からは、国立がんセンター院長市川平三郎博士などが参加し、集団検診分野では東北大学公衆衛生の久茂茂教授、そして疫学と予防分野からは筆者が参加した。米国から病理を専攻しているMing博士とその夫人のがん遺伝子専攻のLee博士が出席。中国全土の三市（北京、上海、天津）と十五省の代表約50人を交えて討議した。

中国では本格的な集団検診がまだ、行われていない。標準的な方法も、これから検討という段階であった。これに対し疫学はかなり進歩しており、中国全土の胃がん分布地図が作られているだけでなく、分析疫学的研究も活発で、例えば上海、北京、西安、沈陽、福州五市の398例の胃がんと同数の対照についての患者対照比較研究では、「stepwise regression analysis」にもとづいて要因分析が行なわれ、がんの家族歴、食事中怒りっぱい、新鮮な野菜をとらないなどが統計学的に有意に関連していることなどが見出されている。今後、どのように疫学研究を進めたらよいか、その計画を数人の中国の疫学専門家と共に論議、適当な数の村を無作為に選択し、栄養改善を行ない、対照の村と比較する介入研究の可能性などを検討した。中曽根がん研究計画の一環として中国医科大学と協力して青木國雄教授らは既に胃がんの野外研究を実施しているが、同様の試みは、中国内の胃がんの他の流行地でも試みる価値があるのではないだろうか。中国の疫学者とより密接な交流の必要性を痛感して帰国した。

(平山 雄)



クウェートの禁煙ポスター

## 〔国際会議報告〕

### モスクワで開かれた「がん研究と喫煙対策に関する国際会議」(1985年6月4-6日)に出席して

これまでにがんの疫学・対策に関する国際会議および喫煙対策に関する国際会議はいくつか開催されているが、がん研究・対策と喫煙対策を結びつけた国際会議は少ない。去る1985年6月4-6日にモスクワでIARCとUSSRのAll-Union Cancer Research Centreの共催でInternational Meeting on Cooperation in Cancer Research and Control Tobacco …… A MAJOR ISSUEという主題の国際会議が開催された。筆者はこの会議に招待されたので、以下に会議のトピックス、モスクワの印象などについて報告する。

上記の国際会議はモスクワの郊外にある All Union Cancer Center という巨大ながん診療研究センターで開催された。本会議はクローズドミーティングで参加者はIARC(Tomatis 所長他5名)、USA 4名、英国3名、オーストリア2名、イタリー2名、日本、中国、インド、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、ハンガリー、東独、西独各1名およびソ連の参加者約10名の合計約40名の小人数の会議であった。これらの参加者の中には英国の Sir Richard Doll 夫妻、Dr.Richard Peto、ノールウェイの Dr.K.Bjartveit、スウェーデンの Dr.Lars Ramstrom、オーストリアの Dr.M.Kunze、USA の Dr.Hoffmann、アメリカがん協会の Dr.S.D.Stellman らの喫煙とがんに関する研究、喫煙対策で有名な学者と共に多くの有名ながん研究者が含まれていた。特に印象に残ったのはIARCの Tomatis 所長をはじめ、イタリーの国立がん研究所長の Dr.U.Veronesi、ハンガリーの国立がん研究所の Dr.S.Eckhardt、東独の国立がん研究所長の Dr.S.Tanneberger らの各国のがん研究所長が喫煙とがん、ひいては喫煙対策に多大な関心を寄せていることであった。

会議は喫煙と健康についての総論、がん、循環器疾患、呼吸器疾患と喫煙の関係についての各論のセッションからはじまり、次いで、世界各地の喫煙とがんの実態報告があった。筆者はこのセッションで日本のがんと喫煙の実態およびその推移について報告した。USSRの喫煙率は地域により異なるが、平均して成人男子は60-65%、成人女子は10%前後であった。肺がん死亡率は男女とも上昇傾向を示している。中国の喫煙の実態については上海のがん研究所長の Dr.Y.T.Gao から報告があった。中国全体の喫煙率は不明であるが、1982年に上海で行われた調査では20才以上の男子で47.2%、女子で5.6%であった。上海における喫煙の特徴として20-30才代の女性の喫煙率は1%以下と低率であるが、50才以上では10-15%と上昇していること、現在でもフィルター付のタバコは約25%程度にとどまっていることである。筆者は会議の主催者から事前に開発途上国への喫煙の蔓延について報告することを依頼されていたので、開発途上国における喫煙の実態(タバコ消費量の増加)、タバコの輸入、栽培の増加および喫煙者の増加の農業、経済、健康への悪影響などについて報告した。特に、近年先進諸国でのタバコ消費量の落込みを反映して、先進諸国から開発途上国へのタバコの輸出が増加しており、開発途上国の経済、健康に悪影響を与えていることに対して警告を発した。

会議はさらに喫煙対策に及び、低タール、低ニコチンタバコの開発とその効果、喫煙対策のための法制化、健康教育についての報告、討議が行われた。会議の最終日には主として喫煙対策についての勧告がまとめられた。その骨子は次のとおりである。

- (1) 喫煙習慣がひろがっている国では禁煙対策を推進し、喫煙習慣がまだひろがっていない国では喫煙習慣のひろがりを予防する必要がある。
- (2) 喫煙者には喫煙のリスクを十分知らせ、禁煙した場合のメリット(リスクの低下度)も十分知らせる必要がある。
- (3) タール成分の多いタバコを製造している国では低タールタバコを開発する必要がある。
- (4) 喫煙者がかなりいる国ではタバコ関連疾患がかなりの長期間にわたって発生するので、長期的な喫煙対策を立てる必要がある。

最後にモスクワの印象を述べると、6月上旬で気候は快適で、緑も鮮やかであったが、モスクワ市内の中心部でも掲示や看板はロシア文字ばかりで、英語も通じにくく、やや不便を感じたこと、食物がやや単調(チーズ、ヨーグルト、ソーセージ等が中心で野菜が少ないことなど)であること、中年女性は異常に太っている人が多いこと、ただし、ポリショイ劇場のバレリーナは抜群にスタイルがよいことなどであった。

(富永祐民)

## 「第9回 日本がん疫学研究会」予告

本年度総会での御指名によりまして、来年の第9回疫学研究会を千葉でお世話させていただきます。

テーマ

がん病因における宿主要因と環境要因

日時

昭和61年6月 (未定)

会場

千葉市内 (未定)

ひとつのがん発病に対する宿主要因の関りの重要性については、多くの研究者・臨床家が意識しているにもかかわらず、疫学的ないしは実験的にそのことを証明することは容易ではありません。

狭義に遺伝素因というテーマに限定せず、男女差、年齢効果、感染症既往、栄養条件、生理機能、内分泌、免疫など広い意味での宿主要因の影響、ならびにそれと外因との関りについての疫学的アプローチの方法についてディスカッションしたいと考えております。

演題は前回までの方式を踏襲して、公募と致しますので、ふるって御参加頂きますよう、御案内申し上げます。

千葉県がんセンター  
疫学研究部  
村田 紀

## 第8回日本がん疫学研究会開催される

第8回日本がん疫学研究会は昭和60年6月28日(金)、秋田市のアキタパークホテルにおいて、秋田大学医学部の加美山茂利教授を会長とし、〈がんと食事・栄養—疫学的ならびに実験的アプローチ〉をメインテーマとして開催された。

研究会に先立って、前日の6月27日(木)、午後4時から、同ホテルにおいて幹事会が開かれた。従来、幹事会は研究会当日に総会に先立って短時間開催されるのが通例であったが、今回は本研究会の今後の方針を討論するというので、とくに時間をとっていたものである。

討議の内容について要点を述べると、その中心は本研究会の活性化のための若返りに関するものであった。その1つとして、会則改正を行い、幹事に60歳の停年制を設け、この年齢を越えた役員は原則として特別会員(場合によっては顧問会員)になって、引きつゞき本会の発展に貢献していたゞくこととした。そして、上述の会則改正により、平山雄先生が特別会員に推され、青木国雄先生を新代表幹事に選出した。また、役員の一部改選ならびに幹事の増員が行われ、これによって一挙に12名の新進気鋭の幹事が生まれ、本研究会の活性化に飛躍する態勢が整った。これらの会則改正ならびに役員の変更・増員は翌日の総会において承認された。

研究会のプログラムは次の通りである。

〈一般演題〉 (9:00 ~ 12:16)

1. コレステロールと癌死亡(予報)
  - 浜島 信之、久保 奈佳子、浅野 明彦、水野 正一、勝田 信行、佐々木隆一郎、青木 国雄  
(名大・医・予防医学、国立公衆衛生院・疫学)
2. 尿酸値とその追跡による癌との関連について
  - 鎌石 和男(放影研・臨床)、秋葉 澄伯(放影研・疫学統計)
3. 血清ペプシノーゲンと胃癌
  - 馬淵 清彦、秋葉 澄伯(放影研・疫学統計)
4. 食糧成分中におけるカロチノイド類の腫瘍免疫に及ぼす影響
  - 富田 純史、廣畑 富雄(久留米大・医・公衆衛生、九大・医・公衆衛生)
5. 生活環境因子と芳香族炭火水素水酸化酵素活性
  - 長山 淳哉、清原 千香子、池田 正人、廣畑 富雄(九大・医・公衆衛生)、甲木 孝人(熊本大・医・微生物)
6. 野菜中の変異原性抑制物質のベンツ(a)ピレン代謝におよぼす影響
  - 道岡 攻、三浦 恵子、加美山茂利(秋田大・医・衛生)
7. エノキダケ食の発がん予防に関する疫学的・実験的研究
  - 小田切健自、田中 茂男(北信総合病院・腫瘍研) 倉田 光三、西沢 賢一(長野県農村工業研)
8. 胃がんと栄養食物に関する患者対照研究
  - 廣畑 富雄(九大・医・公衆衛生)、柴田 彰、廣畑 一代(久留米大・医・公衆衛生)、A.Nomura,L.Kolonel(ハワイ大癌センター)
9. 直腸癌・結腸癌の食餌・嗜好品習慣に関する症例・対照研究
  - 渡辺 能行、東 あかね、巖 善昭、川井 啓市(京都府医大・公衆衛生)
10. 過去25年間の日本病理剖検報よりみた本邦前立腺癌の動態
  - 中尾 昌宏、渡辺 浩、小林 徳明、宮下 浩(京都府医大・泌尿器)

11. 前立腺癌の患者一対照研究
  - 大石 賢二、岡田謙一郎、吉田 修(京大・医・泌尿器)、大野 良之(名市大・医・公衆衛生)
12. 卵巣癌の発生における食生活要因—ケースコントロール研究の結果から—
  - 森 満、三宅 浩次(札幌医大・公衆衛生)
13. 喫煙者における食習慣
  - 水野 正一、浅野 明彦、浜島 信之、勝田 信之、佐々木隆一郎、青木 国雄(名大・医・予防医学)
14. 父母の出身地別にみた食習慣と死因の傾向(第1報)
  - 勝田 信行、佐々木隆一郎、水野 正一、浜島 信之、浅野 明彦、青木 国雄(名大・医・予防医学)
15. がんと栄養との関係の考察
  - 平山 雄(予防がん学研究所)

〈総 会〉 (13:15 ~ 13:40)

〈特別講演〉 (13:40 ~ 14:30)

発癌研究における疫学と実験的研究—相互理解への道と壁—

講 師 東京大学教授(医科学研究所癌細胞学研究部)  
黒木 登志夫

座 長 予防がん学研究所 平山 雄

〈シンポジウム〉 (14:40 ~ 17:00)

秋田県における消化器がんの疫学

司 会 加美山 茂利(秋田大学医学部)

青木 国雄(名古屋大学医学部)

- (1) 秋田県における消化器系がん死亡の地理的分布と推移  
大村 外志隆(秋田大・医・公衆衛生)
- (2) 食道癌患者の生存率に影響する因子  
中村 正明(秋田大・医・第二外科)
- (3) 集団検診からみた秋田の胃癌  
井上 修一(秋田大学保健管理センター)
- (4) 胃の組織所見と住民の食生活  
山川 博(秋田市 山川内科)
- (5) 食事中変異原性と胃癌の疫学  
加美山 茂利(秋田大・医・衛生)
- (6) 食習慣と腸内通過時間  
島田 彰夫(秋田大・医・衛生)
- (7) 大腸癌の発生と抑制に関する因子  
成沢 富雄(秋田大・医・第一外科)

研究会終了後、引きつゞき同ホテルにおいて懇親会が行われ、終日発表と討論に疲れた会員にとって、濁をいやし、またお互いに遠方より来秋し久しぶりに再会した喜びを語り合う機会となった。初夏の秋田の爽やかな夕べを快い興奮のもとにすごし、来年の千葉での再会を約して散会した。

なお、この研究会での報告をもとにして、プロシーディングスが毎年編集、発刊されているが、本年は「癌の臨床」特集号の形で刊行されることとなり、その準備が進められている。

最後に、本研究会の秋田での開催にあたり、いろいろ御助言をいただいた平山雄、青木国雄、富永祐民の諸先生、ならびに全国から遠路をご出席いただいた会員の皆様にお礼を申し上げます。

(加美山茂利)



# INTERNATIONAL ASSOCIATION OF CANCER REGISTRIES CONNECTICUT TUMOR REGISTRY: 50 TH ANNIVERSARY

## WHEN AND WHERE

The 1985 meeting of the Association will be held at the Hilton Hotel, Hartford, Connecticut on 10-12 December 1985. Hartford is the gateway to New England.

## HOW TO GET THERE

Many association members from overseas will enter the US through Boston, Chicago, Miami or New York, whence there are direct flights to Hartford (Bradley Field Airport). There are also direct flights from Canada. Further details in the second circular.

## REGISTRATION FEES

A registration fee of \$ 35 will be payable at the time of registration.

## ACCOMMODATION

The Organizing Committee has negotiated the highly favourable rate of US\$ 59 per night (double) or US\$ 54 (single) for those attending his meeting (further information and hotel booking form will be included with the next circular)

## RELATED MEETINGS

The Department of Public Health, Yale University, New Haven, Connecticut, is planning to hold a one day seminar on the use of cancer registries for research and health planning on 9th December. Transport will be available to Hartford that evening for those attending this seminar.

The SEER Registries will hold their annual review meeting, again at the Hilton Hotel on 13-14 December. Dr. John Young, our General Secretary, and SEER Coordinator, has kindly invited all IACR members who wish to attend to do so.

## THEME OF MEETING

The theme for the structured programme will be Multiple Tumours and proffered papers on this and other topics will be welcome. Please send an abstract to the Organizing Committee as soon as possible but not later than 15 September.

## ORGANIZING COMMITTEE

The Organizing Committee comprises:

Dr. D. Janerich  
Mrs. J. Dalton  
Mr. J. Flannery  
Dr. H. Hansen  
Dr. A. Knowlton

Dr. G. Roush  
Mrs. J. Serbent  
Mr. R. McGuinness (American Cancer Society)  
Dr. J. Young (General Secretary, IACR)  
Dr. C. S. Muir (Deputy Secretary, IACR)

## ARE YOU COMING?

The organisers of the 1984 Fukuoka meeting were greatly helped by receiving an early indication of the number of members likely to attend. Please fill in the enclosed slip—without engagement—and return to:  
Mrs. Jane K. Serbent, 19 Highland Drive, Wallingford, CT 06492, USA

## 新刊紹介

職業がんをテーマに開発された日本がん疫学研究会の第6回研究会で発表された主要な研究論文を会長の倉恒匡徳先生が編集されたプロシーディングである。日本における職業がんの疫学的研究の最近の成果が網羅されていることになる。

ことに、西本幸男教授（広島大）の大久野島毒ガス工場の職業性呼吸がんの研究、吉田修教授（京大）の西陣織従事者の職業性膀胱がんの研究は、戦後日本の職業がん研究を代表するばかりでなく、国際的にも高く評価されている。疫学的論理・方法を使い、基礎医学と臨床医学の両方の立場から、職業がんの存在を疫学的に立証するのにとどまらず、成因の解明、予防にも言及している。

編集の倉恒先生ご自身の職業がんの疫学研究全般についての見解も示されている。ある職業要因がある種のがんの原因であるというためには他の要因も調べておかななくてはならないこと、因果関係の立証には量反応関係が重要なこと、潜伏期の長い職業がんは退職後の発がんの追跡が必要なことが指摘されている。日本では疫学者や臨床家の関心が一般に薄いとされる職業がんの疫学的研究の改善への契機になることを希望する編集の姿勢が、本書に強く表わされている。

疫学の専門家だけでなく、広く臨床医、産業衛生や公衆衛生業務に従事しておられる方々にも、ご一読いただきたい。

癌の臨床 別集

職業がん — 疫学的アプローチ —  
倉恒 匡徳 編

A 5 判、288頁、定価3,900円（送料250円）  
篠原出版 刊

# 日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市千種区田代町

TEL 052-762-6111

編集責任者

愛知県がんセンター疫学部 気付 振替口座 名古屋1-37001

佐々木隆一郎